頭の中の世界切り取るのぞき窓

数学者たちの黒板

ジェシカ・ワイン〈著〉　徳田功訳　草思社　3850円

Jessica Wynne 72年生まれ。写真家。米ファッション工科大准教授。イエール大芸術学部で修士号。

世界各地の数学者たちの黒板の写真。そして、その数学者たちによる数学と黒板についてのエッセーが集められている。

黒板には二つの主要な機能がある。情報を記録することと伝達することだ。この二つの機能の電子化が進む昨今ではあるが、その柔軟さにおいて未だ黒板の右に出るものはいない。

まずは一人で黒板と向き合い、頭の中の具象化されていないアイデアを形にするときに最適だ。もちろんこれはノートでもいい。しかし、その情報を、通りすがりの不特定多数の人に伝えたくなる可能性を考えると黒板にはかなわない。一人、また一人と議論に加わり、黒板の前で対峙するということはよくある。ホワイトボードもいいが、ペンの蓋を開けたまま考え込んでいると焦りが生じるし、書いたものを長く消さずにいるとこびりつく。そして私が選んだペンのインクは大抵切れている！

チョークは日本製が良いと複数の数学者が書いているのが微笑ましい。チョークのネックは粉が出ることで、そこではホワイトボードに軍配が上がる。黒板は手が真っ白になっても意に介さない人に向く。

本書を手に取ったら、ぺらぺらと写真を眺めたい。黒板には文様のような図形や数式が並ぶ。数学者たちの黒板は抽象的で、頭の中にある世界を切り取るのぞき窓のよう。本書にまとめられた109人の数学者――名を成した数学者から大学院生まで、出身も様々だ。女性数学者も少なくない――の言葉は、板上での議論の魅力を語る。

数学者たちはいかに数学の道を歩むことになったのか。パズルが好きで。経済的理由で。異性の気を引きたくて。幼少期の本や、先生との出会い。きっかけは学者の数だけあり、そこに王道はない。だが、数学者への道の傍らには、黒板と黒板の前での議論があった。原著タイトルは「DO NOT ERASE（消さないで）」。議論はこれからも続く。

評・石原　安野（あや）
千葉大学教授・粒子天文学

「知の震源」を広角の文

リスボン大地震　世界を変えた巨大災害

ニコラス・シュラディ〈著〉　山田和子訳　白水社　4180円

Nicholas Shrady　米国生まれで、雑誌や新聞に評論やエッセーを寄稿。スペイン・バルセロナ在住。

1755年のリスボン大地震は、ヨーロッパの哲学や都市計画、宗教的道徳心などに決定的な影響を与えた。聖職者が絶大な権力をもった宗教都市リスボンが、万聖節の朝に一瞬で廃墟と化す――地震が神意に関わらない自然現象であることを、これほど強烈に示す出来事はなかった。そのショックは近代地震学の誕生を促すとともに、ヴォルテール、ルソー、カントら啓蒙思想家たちに小説や社会科学の糧を与えた。18世紀のリスボンは20世紀のアウシュヴィッツのように、いわば〈知の地震〉の震源地になったのである。

私の知る限り、本書はこの大地震を扱った書物としては、非常に良質の部類に入る。そこでは「社会が災厄をどのように解釈し、混乱にどのように対応」したかが、スマートな文体で目配りよく再現されている。地震前後のポルトガル史を、これだけ広角の文章で描いた著作は少ないだろう。

ウクライナ

松里　公孝〈著〉

まつざと・きみたか　6年生まれ。東京大教授。専門はロシア帝国史やウクライナなど旧ソ連圏の現代政治。著書に『ポスト社会主義の政治』、共編著に『ユーラシア地域大国の統治モデル』など。

しかし、14年のユーロマイダン革命が転換点となる。革命が急進化してウクライナ民族主義が高揚すると、反対派への暴力が広がり、南東各州では緊張が高まった。南部クリミアはロシアの併合を受け入れ、東部ドン

読書